

2022 年度 NGO スタディ・プログラム最終報告書

提出日	2023 年 2 月 26 日		
氏名	近藤碧		
所属団体(正式名称)	特定非営利活動法人 World Theater Project		
派遣タイプ	実務研修型 (集合型)		
研修国	カンボジア		
受入機関名	① 公益社団法人 日本ユネスコ協会連盟 カンボジア事務所 ② Phare Ponleu Selpak School		
研修期間	2022 年 11 月 27 日～2022 年 12 月 8 日	研修日数	12 日間
研修テーマ	ノンフォーマル教育の実践や運営モデルを学ぶ ～教育×文化芸術を提供する児童映画館の実現に向けて～		

1 導入 (研修前の問題意識、所属団体や NGO が持つ課題や課題解決方策の分析など)

1.1 背景と課題

弊団体は、2012 年の発足以来、途上国の子どもに、映画という文化芸術を鑑賞・体験する機会を提供している。国境を越えて心の琴線に触れる作品を選定し、小学校やコミュニティ広場などにて移動映画館を開催し、これまで 15 ヶ国で約 8 万人の子どもたちに映画を届けてきた。

10 年間の活動で蓄積した知見を踏まえ、当団体では、移動映画館に加え、今後の新規事業として常設の児童映画館を設置する構想を考えている。映画を通じ、脆弱な環境にある子どもの文化芸術体験と教育機会を増やしたいという思いから、日本の児童館に近い、地域における子どもの拠点づくりを計画している。この児童映画館では、子どもたちが多様な映画を鑑賞することで夢を感じとったり、ワークショップ (子ども映画の制作など) を通じ、表現力や創作力・クリエイティブな思考力を育むことを目指している。また、障害や貧困など様々な理由で学校教育からドロップアウトしてしまった子どもに対するフリースクールを併設することで、学びの機会を提供するコミュニティ拠点とすることを考えている。

他方、当団体では、このようなコミュニティ拠点の運営や教育カリキュラム設計の知見がなく、事業実現に向けては、実務的な知見を得る必要がある。本プログラムを通じ、実務的示唆を得て、早期実現につなげていきたい。

1.2 課題解決のための方策 (仮説)

弊団体が構想している児童映画館は、映画館を中心に、文化芸術の体験・創作活動、不就学児童に対する教育、また、遊びや交流を通じた多様な学びなどを提供するという観点で、ノンフォーマル教育を中核とした事業である。途上国では、基礎教育へのアクセスが拡大している一方、経済的・地理的要因や障害・ジェンダーなど様々な理由により、学校教育からドロップアウトしている子どもは深刻化しており、このような不就学児童を包摂し教育へのアクセスを確保する上で、ノンフォーマル教育は重要な役割が期待されている。

カンボジアにおいても、さまざまな NGO がユニークなノンフォーマル教育を提供している。特に、弊団体の構想に近いテーマとして、芸術教育およびオルタナティブ教育の活動モデルに注目し、「ノンフォーマル教育の実践や運営モデルを学ぶ～教育×文化芸術を提供する児童映画館の実現に向けて～」を研修テーマとして設定した。

2 本文（研修テーマについて明らかになったこと、課題解決を前提とした研修実施内容の詳細報告）

2.1 研修概要

① 目的

カンボジアにおけるノンフォーマル教育・幼稚園・図書館など多様な役割を果たすコミュニティ拠点の仕組みや実施体制を学び、現在計画している児童映画館事業の構想に活かす。

② 訪問先

- (1) 公益社団法人日本ユネスコ協会連盟 カンボジア事務所
(the National Federation of UNESCO Associations in Japan (NFUAJ) Cambodia Office)
- (2) Phare Ponleu Selpak School（英語名：The Brightness of the Arts）

③ 研修内容

活動現場の見学、運営実務の視察、オリエンテーションや意見交換を通じ、以下の項目について学ぶ。

(ア) コミュニティ拠点の多様な機能・支援内容

ノンフォーマル教育、幼稚園、図書館、児童福祉活動、その他

(イ) 運営方法

運営体制、現地スタッフの人材育成、現地の行政機関との連携、カリキュラム・教材など

2.2 研修報告

訪問した団体それぞれについて、上記の項目に沿って得た知識や実務上の学びは以下のとおり。

(1) 公益社団法人日本ユネスコ協会連盟 カンボジア事務所（以下、「NFUAJ Cambodia」とする）

(ア) コミュニティ拠点の多様な機能・支援内容

カンボジアで30年以上の歴史を有する「アンコール寺子屋プロジェクト」では、地域における生涯教育拠点である寺子屋（Lifelong Learning Center。以下「寺子屋（LLC）」と記載）をシェムリアップ州内に21カ所設置している。寺子屋（LLC）は、識字率や貧困率が高い地域に設置され、復学支援プログラム、コミュニティ図書館、コミュニティ幼稚園などの教育活動や就学・進学支援など、公教育の枠外での教育活動を行っている。また、識字教育や収入向上プログラムなども実施しており、子どもに限らずすべての地域住民の生涯教育の場となっており、地域住民による運営を通じ、多様な役割を果たすコミュニティ拠点が持続的に展開されている。

① 復学支援プログラム（初等教育）

復学支援プログラムは、小学校を中途退学してしまった子どもに再び学習機会を提供するものであり、小学校課程を2年間で修了できるよう特別に編成されている。修了すると小学校卒業修了証明をもらえ、公教育の中学校に進学して勉強を続けることができるようにしている。復学支援プログラムを卒業した生徒に対しては、自治体による修了証明書の発行や中学校への進学手続きまで、NFUAJ Cambodia がフォローしている。公教育へ橋渡しすることを目指し、教育の提供に加え、通学用の自転車や学用品の購入費なども支援し、中途退学の要因を取り除く取り組みがなされている。



写真：復学支援プログラム（初等教育）の授業の様子

② コミュニティ幼稚園

農村地域に就学前教育の場をつくることを目的に、3歳—5歳の未就学児を対象としたコミュニティ幼稚園を寺子屋（LLC）に設置している。遊びを通して、文字や数字、マナーを学ぶことを目指し、国語（クメール語）、英会話、数と計算、マナー、創作（図工）、体育などの授業が行われている。寺子屋（LLC）まで遠い世帯も多いため、各村々でもサテライト幼稚園を設置している。

カンボジアの農村地域では、幼稚園がほとんどなく、幼い子供を預ける場所がないため、田畑へ連れていき、労働力として徐々に位置付けられてしまい、小学校に入学しそびれるケースも多い。そのため、コミュニティ幼稚園を通じ、保護者への小学校入学に向けた支援にもつなげることを目指している。



写真左：コミュニティ幼稚園に集まる幼児たち

写真右：教室にあるポスター（コミュニティ幼稚園で学ぶクメール語と数の概念）

③ コミュニティ図書館

コミュニティにおける情報センターとして、寺子屋（LLC）内に設置され、地域住民によって運営されている。本のジャンルは、健康・家畜・野菜・宗教・社会から、絵本まで多岐にわたる。図書司をおいている寺子屋（LLC）もあり、子ども向けのアクティビティとしては、図書の貸出の他、折り紙、塗り絵・お絵描き、歌、読み聞かせなどを行っている。カンボジアにおいては図書館という公共施設がない中、寺子屋（LLC）に設置されたコミュニティ図書館には、連日沢山の子どもが集まっていた。



写真左：寺子屋（LLC）内にあるコミュニティ図書館

写真右：塗り絵やお絵描きのアクティビティ

④ 進学支援活動（奨学金事業）

カンボジアでは、義務教育政府目標値（2030年までに義務教育（初等・中学校）の完全普及達成）と照らして、中学校の就学率は58.16%（2020年全国平均）であり、労働力としての家庭での役割の増大などに伴い、中学校は義務教育で最も格差が表れる年齢層ともされる。NFUAJ Cambodiaでは、公教育である中学校から外れてしまった子ども達への進学・修学支援として、寺子屋（LLC）の卒業生や中学校の中途退学者を対象に、奨学金の給付事業を行っている。また、制服や学用品などの支援の他、補習授業の実施、また、中学校と連携し、面談や家庭訪問などのフォローアップを行っている。

⑤ その他（栄養改善、職業訓練など）

栄養不足による発育遅延や身体的成長の遅れが見られる子どもが多いことから、栄養バランスのとれた食事の提供を通じ、健康な身体づくりと学習効果の向上を図ることを目的に、子ども向けの栄養プログラムを実施している。月に2回ほど、寺子屋（LLC）にて給食を提供し、栄養と料理について学ぶ教室を行った後、食材やレシピを配り家庭で実践してもらうようにしている。

さらに、就労対象となる年齢の若者には、収入向上プログラムとして、専門スキルの提供を通じ、収入を得られる手助けが行われている。楽器演奏で収入を得られるよう伝統楽器の演奏技術の習得を図る教室を開いたり、観光業への就労に英語教室やパソコン教室などを開催している寺子屋（LLC）もある。

(イ) 運営方法

・ 運営体制

寺子屋（LLC）では、約7人～12人の地域住民が運営委員となり、無報酬で寺子屋（LLC）の運営に携わっている。ボランティアによる運営活動を継続させる工夫として、負荷が大きくなるよう、委員長以外にはローテーション制度を設けている（月間約20日の稼働日を分担し、1人あたりの月間従事日数を2-3日とする）。NFUAJ Cambodiaは、寺子屋運営委員会を支援する立場で、寺子屋（LLC）設置当初の立ち上げ支援や持続的な運営に向けた人材育成・能力開発などを行っている。

・ 人材育成方法

NFUAJ Cambodiaの現地スタッフは、5年～10年以上など継続年数が高い優秀な職員ばかりであり、人材育成の秘訣をNFUAJ Cambodia事務所に尋ねたところ、以下のような工夫をしていた。

- 同じ仕事をする同志を支援する意識で、上司と部下ではなく「友達」として接する
- インフォーマルな関係を重視し、人生の友人として、気さくに相談できるような関係性を築く
- 言葉や概念を伝えるだけでなく、どうやって実践するのかを、具体的に見せる

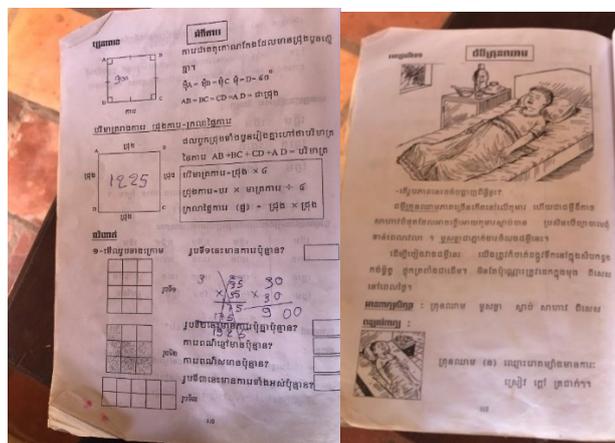
また、寺子屋（LLC）の運営に従事する地域住民の人材育成に際しては、オリエンテーションやワークショップを行う他、持続性や主体性の重要性および具体的な運営方法を所長自らが講義したりデモンストレーションしている。その他、各寺子屋（LLC）が持ち回りで学び合いの研修を主催し、研修の設計やファシリテーションを自ら担うことで、主体者意識の醸成を図るようにしている。

・ 現地の行政機関との連携

寺子屋（LLC）の設置や活動のモニタリング、中長期戦略の策定などの各プロセスにおいて、シュムリアップ州教育青年スポーツ省ノンフォーマル教育課（以下、「教育省」と記載）と連携している。また、ノンフォーマル教育の教科書（識字教育も含め）については、教育省が策定し、寺子屋（LLC）に無償供与している。

・ カリキュラム・教材など

復学支援プログラムで用いる教科書には、算数や健康教育の他、ライフスキルに関するとして、自転車の乗り方、日々の生活に役に立つ実践や知識（交通事故や宗教などのテーマも含め）などが取り上げられている。成人向けの識字教育のカリキュラムにおいても同様であり、単に文字の読み書きを学ぶのではなく、生活の中での具体的なシチュエーションや実践に焦点を当てながら、算数・社会・国語などに関連づけて学べるよう、テキストが作られている。ノンフォーマル教育の教材は、UNICEF などの国際機関が当初コンテンツや構成の設計に関わったが、その後は、カンボジア教育省が独自に更新しながら制作しており、これらの教科書は教育省から全て無償で寺子屋（LLC）に配布されている。



写真：復学支援プログラムの教科書

・ 事業設計および実施段階での留意事項

寺子屋（LLC）設置に際しては、非識字率や貧困率などのデータを踏まえつつ、安全性や地域のオーナーシップの度合いなども鑑み、地域・場所を選定している。また、教育省による公立学校が設置される場合は、寺子屋（LLC）は引き上げるなど、地域でのバランスを鑑み、重複や分散が生じないよう留意していた。

寺子屋（LLC）設置後は、地域住民による持続的な運営を実現するため、出口戦略が設けられている。寺子屋（LLC）設置から5年間を基準とし、5年目以降には財政面・運営面での自立を目指すべく、設置

当初から、寺子屋運営委員会の当事者意識や主体性を醸成する様々な工夫を取り入れている。「辛い場所はどこか（ニーズの特定）、辛い場合はどう解決したらいいか（最も実効的な対処法）を知っているのは、コミュニティの住民自身である」という NFUAJ Cambodia 事務所長の言葉に示されるとおり、活動の選定やニーズの特定など全てのプロセスにおいて、住民主体となることを意識している。NFUAJ Cambodia では、寺子屋(LLC)の設置当初は財政面および運営面での支援を重点的に行うが、地域住民による運営が順調に動き出すのを見守りながら、徐々に役割や支援内容をステップダウンし、自立と持続性を引き出すことを重視している。

(2) Phare Ponleu Selpak School

カンボジアのバタンバン州の市内にある Phare Ponleu Selpak 学校(以下、「Phare」と記載する)は、貧困層が多い地域の子どもたちに、芸術教育を無償で提供する NGO 団体である。アートを中心としたノンフォーマル教育の他、キャンパス内には、公立小学校や幼稚園、児童発達センター、サーカス会場、展示室やカフェ、図書館なども併設し、脆弱な子どもを支援する活動を実施している (5.2.参照)。

同校は地域の脆弱な子ども・若者を支援対象とし、約 1,000 人の子どもが通学している。アートスクールで提供するカリキュラムとしては、グラフィックアート、パフォーマンス(サーカス)など多岐に亘る。アートのスキルの習得と実践を学び、職業キャリアを手に入れる職業教育を重視しており、就職率 100% を誇っている。基礎的なノンフォーマル教育の学費は無償であり、貧困層の子どもには給食費や住居費などの生活支援も行っている。また、相談援助やカウンセリング、アドボカシー等のソーシャルワークを展開し、脆弱な貧困世帯が多い地域で、行政と連携し、子どもの健全な発育と家族支援を推進している。



写真：キャンパス内の建物や壁からも、アートの要素を重視していることがうかがえる。

(ア) コミュニティ拠点の多様な機能・支援内容

① ノンフォーマル教育（芸術教育）

二つの教育課程（スクール）に分け、それぞれで無償の教育カリキュラムを提供している。

a. パフォーマンスアート課程

サーカス、演劇、音楽、ダンスを学ぶスクールであり、7歳から18歳までの子どもを対象に、無償で教育を提供している。年齢やレベルに応じ3段階に分けている。例えば、サーカスを学ぶコースでは、アクロバットや体幹バランス、ジャグリング、身体運動の他、補完的な科目として、演劇、音楽、ダンスを学ぶカリキュラムとなっており、総合的にパフォーマンス技術を学べるようになっている。



写真上：サーカスのコースでのアクロバットの練習風景と、サーカスクラスの掲示版
 写真下：現代音楽（エレクトーン）や伝統音楽の授業の様子

b. グラフィックアート課程

アニメーション、グラフィックデザイン、ビジュアルアートを中心とした教育課で、年齢で区分した3つのコースを提供している（学費は全て無償）。

レジャーコース	
年齢	内容
13歳以下	アートを通じ、自分の個性と世界とのつながりをつかむことを目的に、デッサンや塗り絵などを楽しむ活動を実施（出席や成績はとらない）。
アカデミックコース	
年齢	内容
13歳以上	描画・デッサン、ペイント、彫刻を中心に、講師による授業や実習を行う。
準備コース	
年齢	内容
16歳以上	職業訓練プログラムへの参加に関心のある生徒向けの1年間のコース。美術史、イラストレーション、デッサン、遠近法などの専門知識を学ぶ。

② キャリア訓練コース

芸術分野でのプロフェッショナルを目指すため、ノンフォーマル教育に続くキャリア訓練コースを設けている。パフォーマンスアート課程およびグラフィックアート課程それぞれで、職業訓練コース（約2年間）と、プロフェッショナルコース（約2年～3年）があり、授業料は有償である。他方、学費と生活支援のための奨学金を多く供与しており、学費の免除や教材の支給、宿泊や生活費の支援も行っている。

アートのスキルを通じキャリアを掴むことを重視し、就職率 100%を誇ることから、他州から通学する子どももいる。最上位のプロフェッショナルコースに入学した生徒はサーカス団のショーに出演できる。



写真：グラフィックアートコースの卒業生の作品（制作したアニメーションやロゴデザインなど）



写真：Phare キャンパス内の会場でサーカス公演に出演する生徒たち

③ 児童福祉支援活動（児童ソーシャルワーク）

対象地域は、人身売買、性被害、児童虐待などが多い地域であり、Phare では社会支援部を設け、ソーシャルワーカーが支援活動を行っている。子どもへのカウンセリングを行う他、専門クリニックの治療につないだり、予後のフォローアップも行っている。また、キャンパス内にいる子どもの安全と精神面の健康を確保するため、ソーシャルワーカーが見回りし、暴力やいじめがないか、表情が暗い生徒はいないか、敷地内のあらゆる場所を確認している。

脆弱な子どもや若者の支援は Phare のミッションであることから、キャンパス内のすべての施設やアートスクールでは、教師が生徒の表情と出席率を丁寧に観察することを徹底させている。欠席が多かったり、元気がないなど、子どもの様子に変化があった場合は、社会支援部に連絡することとなっている。

また、子どもに対する直接支援だけでなく、保護者による地域見守り活動の企画運営として、生活困窮家庭や虐待のリスクがある家族への訪問などを行っている。さらに、アドボカシー活動も積極的に推進している。子どもの権利や体罰禁止についての認知拡大のため、ビデオの制作や保護者や住民向けの講習会を開催する他、出前授業を地域内の学校で展開している。

④ その他（奨学金、児童発達支援センター）

ノンフォーマル教育の学費は無償である（キャリア訓練コースを除く）が、貧困層が多い地域のため、就学支援を通じた家庭支援を行っている。アセスメントとニーズに基づき、適用する支援区分を決定しており、5段階の支援パッケージを設けている（区分1：給食の無償支援、区分2：給食および文具教材の供与など）。

また、児童発達支援センターでは、キャンパスに通わない地域の子ども達を対象に、多様な遊びや学びを提供するアクティビティを提供している。さらに、保護者に対する生活支援や職業訓練として、クメール語の識字教室、英語教室、パソコン教室なども行っている。

(イ) 運営方法

・ 運営体制

Phare は NGO 団体であり、現在 75 人の職員と 4~5 名のボランティアにより運営されている。ボランティアは主に EU からであり、ファンドレイジング、プログラミング、データベースマネジメントなどの専門があるボランティアを受け入れている他、スキルがあるプロボノが講師として教育活動に携わっている。組織体制を見ると、アートスクールは計 18 名の職員で運営されているのに対し、社会支援部は 10 名体制となっており、ソーシャルワーク活動が重視されていることが分かる。

・ 人材育成方法

約 1,000 人の子どもたちへの無償の芸術教育やソーシャルワーク活動を約 80 名のスタッフたちが支えている。10 年以上の勤続年数のスタッフも多く、有能な人材が意欲的に長く勤務している理由として「コミュニティに所属していると感じられから」「NGO スタッフではなく、コミュニティの一員としてコミュニティのために貢献していると実感できること」という意見が挙げられた。

Phare では組織に関わる人のことを、Phare member と呼び、「地域の発展のために」という同じミッションのために動いている同志としてお互い助け合う文化を重視している。

・ 現地の行政機関との連携

脆弱な家庭や子どもの支援活動において行政機関との協働は不可欠であり、Phare では役所と協働し、貧困家庭の子どもや世帯のニーズの特定、生活状況のアセスメント、啓発活動などを行っている。

・ カリキュラム・教材など

アートスクールのカリキュラムや教材は、Phare が独自に開発・制作している。確実にキャリアにつなげることを重視し、舞台やステージでの実践経験を積むため、海外公演ツアーもカリキュラムに入れている点がユニークである。教員に関しては、国内外の団体でアーティストとして活躍してきた人材を招聘している。例えば、サーカスのコースでは、武芸分野で海外でも実務経験を積んできた 3 名がコース運営を行っていた。

・ 事業設計および実施段階での留意事項

Phare の対象は脆弱な子どもと若者であり、複雑なバックグラウンドをもち、芸術や教育との接点も限定的であった子どもが多いことから、子どもの自由な探索心を大事にしている。子どもの可能性は未知であり、身体的発達や出会いによって、興味や関心も変化する。また、実際に試すことで、自分の特性や不向き向きに気づくこともある。そのため、全てのコースを見学する機会を提供し、コースの変更も歓迎するなど、子どもの探求心・選択を重視した運営を行っている。

財政面においては、「ドナーに頼らず、自分たちで資金を得る」を理念に、ソーシャルビジネス企業を立ち上げ、サーカス興行により事業収益を得ている。国際機関からの助成金はわずかであり、国や行政機関からの補助金はない。代わりに、寄付金の割合が大きく、スポンサーとしては EU 諸国の文化芸術団体が多い。また、ユニークな取り組みとしては、観光客を対象としたキャンパスツアーが挙げられる。Phare のキャンパスを訪問し、職員による説明を聞きながら、キャンパス内にあるアートスクールなどを見学・意見交換するものであり、現在ではバットアンバン州の観光名所として認知されている。欧米の観光客を中心に、キャンパスは毎日訪問者でにぎわっており、ツアー参加者は寄付をしたり、SNS 等で Phare の活動について発信をしていた。



写真：キャンパスツアーで職員が説明しながら案内する様子

3 考察・提言

3.1 結論

本プログラムで訪問した二つの NGO では、アートスクールや復学支援プログラムといった公的教育枠外の教育を提供するだけでなく、図書館や幼稚園、児童発達支援センターなどが併設され、総合的に子どもを支援する活動を展開していた。たとえば、中途退学の要因を取り除くための就学支援や保護者に対する支援、栄養改善、収入向上プログラムや職業教育、さらには、相談援助やカウンセリング、アドボカシーなどのソーシャルワーク活動など、教育活動と並行で多様な支援が実践されている。

ノンフォーマル教育が対象とするのは、さまざまな背景で公教育から外れてしまった子どもとその家庭であり、貧困や暴力など含め複雑なバックグラウンドを背負っている。直接的な教育カリキュラムだけでなく、彼らもつ脆弱性に寄り添って、きめ細やかな福祉的支援と、経済的支援（学費無償化に加え、就学支援や奨学金）、教育から自立・就労への橋渡しの場を提供していくことの重要性を改めて実感した。また、子どもだけでなく、子どもを養育する家庭や地域コミュニティを支援することが、子どもの健全な発育にもつながるという観点を再認識する機会となった。

コミュニティにおける拠点という観点では、地域の人々が集い、地域住民たち自らが地域のニーズをとらえ、新しい発想や活動をも生み出している寺子屋（LLC）は先進的なモデルと感じた。地域住民による財政面および運命面での持続的な発展という難題を、明確な出口戦略をもって、地域住民たちの努力と意識を引き出すことで実現していた。また、Phare では、NGO ではなくコミュニティの一員という意識で、地域に住む子どもと家族の支援を徹底しながら、アートの才能を引き出し、確実にキャリアにつなげるための長期支援を行っていた。社会企業を立ち上げ事業収入を得たり、活動現場をあえてオープンキャンパスとし認知拡大を図るといったアプローチは、有益なアイデアとなった。

今回の研修を通じ、先進的な二つの団体から、具体的な運営ノウハウや人材育成の工夫、また、ノンフォーマル教育活動の知見を得ることができた。当団体で構想している事業の実現に向けては、「地域に開かれた多機能なセンターとして、子どもを中心に地域住民が集まれる場づくりを目指すこと」、「アートの中で子どもの創造力や発想力を引き出し、将来のキャリアにつなげていくこと」、「アート活動による事業収入などで財務面の安定性を確保する工夫すること」を特に意識し、具体化していきたい。

3.2 本研修成果の自団体、NGO セクターの組織強化や活動の発展への活用方針・方法

本プログラムへの参加を通じ、関係者および団体内での意見交換ができ、シエムリアップ州にて、映画館を中心とした児童館やプレイルーム、職業訓練などを併設したコミュニティ拠点を設置する構想で考えている。実現に向けた調査やファンドレイジングを行い、事業の実現を目指していきたい。

また、弊団体は、ノンフォーマル教育の中でも、文化芸術へのアクセスという観点に着目しているが、同分野で活動している NGO は限定され、日本の団体による活動としての蓄積は十分でない分野である。他方、欧米 NGO では、芸術文化にレジリエンスにつなげるプログラムやアートを教材とする教授法も注目されている。本プログラムで得たアイデアを踏まえ、弊団体では、映画を通じた文化芸術体験を増やしていく予定であり、日本の NGO に対しては、これらの活動モデルや子どもへの教育的意義の言語化し発信していきたい。

3.3 テーマに関する日本の国際協力分野への提言

カンボジアの場合、ノンフォーマル教育に配分される予算は、教育予算全体の約 2-3% であり、依然、ノンフォーマル教育の活動は NGO による草の根活動が中心となっている。ノンフォーマル教育には様々なアプローチがあるが、公教育から外れてしまった子どもに対するオルタナティブ教育や専門スキルの習得を通じた職業開発という観点でも、ノンフォーマル教育が貢献しうる役割は非常に大きい。欧米では芸術分野が注目されている他、インドではプログラミングをノンフォーマル教育として提供する活動も出てきている。日本の NGO セクターは教育分野で長い草の根活動の実績を有する団体が多く、公教育では出来ないユニークなアプローチを通じ、ノンフォーマル教育の重要性や意義をより発信していくことが重要である。

4 団体としての今後の取り組み方針

弊団体は、「総合芸術」と言われる映画を用いることで子ども達の心の成長に貢献できればと、2012 年の活動発足以来、カンボジア農村部等、映画を観る機会がない地域に暮らす子ども達を対象に移動映画館を開催して参りました。その日映画で新しい世界に出会ったことで、子ども達の中に新たな目標ができる等の種まきになるかもしれないと考え、私たちはその活動を「夢の種まき」と考えて参りました。移動映画館は広く多くの子ども達に種をまけるという利点がある一方、映画鑑賞が子ども達の心にどのような効果をもたらしたのかの効果検証が困難であったり、まいた種から芽が出るのか、芽がどのように育っていくかを追うことができない状況でありました。

このたび新規事業として常設の児童映画館を設置することで、定期的に効果を検証できるだけでなく、児童映画館を訪れる子ども達の芽吹きや成長を追えることも大きな利点と考えております。

近藤が今回受けさせていただいた公益社団法人日本ユネスコ協会連盟カンボジア事務所様及び Phare Ponleu Selpak School 様での研修は弊団体の児童映画館常設に向けて大変有益なものとなりました。弊団体の児童映画館を訪れる対象の子どもも、経済的に豊かではない子ども達を想定しており、そうした子ども達を支援し、児童映画館を中心として子ども達の未来をより良くするきっかけとなる場を創造していくにあたり、両者の取り組みから得られる学びはとても大きいものでした。

具体的な児童映画館の創設ですが、弊団体の現地マネージャーと協働で敷地を確保し、現在建設中であり、2025年夏頃完成予定であります。(予算の関係上数年は青空映画館として常設予定)。日本から駐在員を派遣して、児童映画館を中心として、子ども達のサード・プレイスとなり、花を咲かせるまでを見守れる場所になればと考えております。(特定非営利法人 World Theater Project 理事長 教来石小織)

5 その他

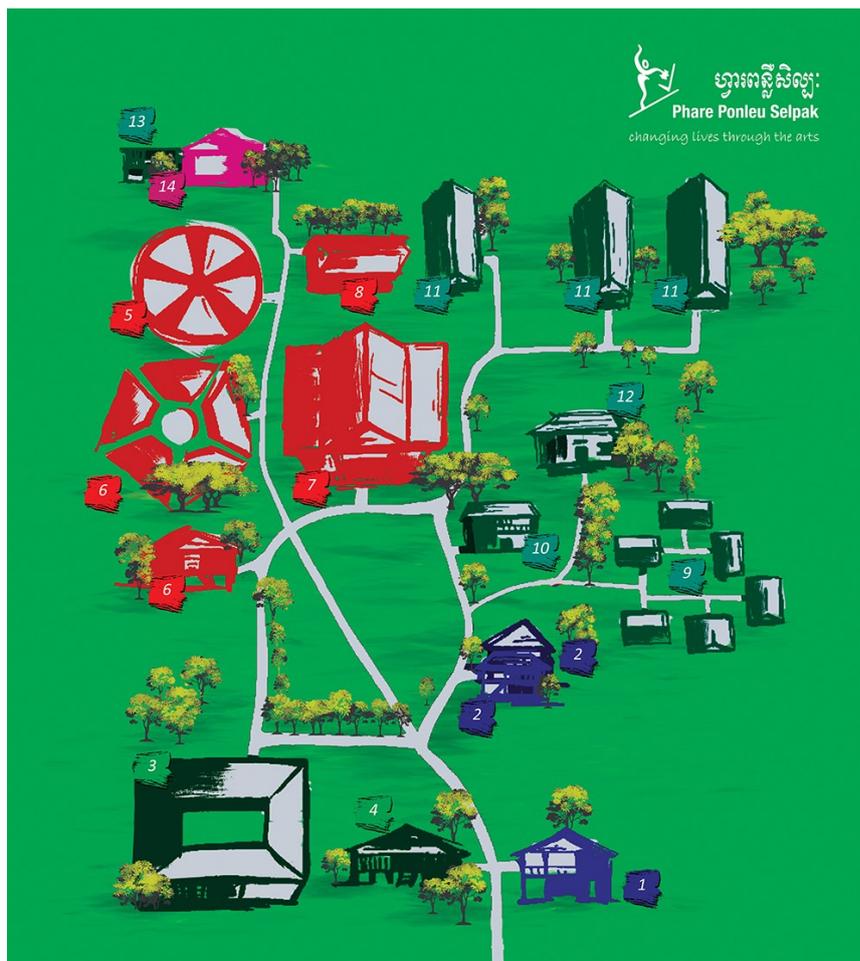
5.1 本プログラムや事務局側に対する提案・要望等

特にございません。

5.2 写真類及び研修員が受入先機関に提出した報告書類等があれば、添付

<Phare Ponleu Selpak School のキャンパス内にある様々な施設について>

同校は、もともと、内戦を経験した子ども達に絵を描かせ、言葉にはできない感情を表現するコミュニティセンターを設置したのがきっかけであった。現在では、アートの才能を引き出し、収入を得られるようにするための教育カリキュラムや、地域における子どもの福祉を支援する活動、そして、公立学校や幼稚園も併設する大きなキャンパスとなっている。以下、キャンパスマップおよび施設の写真を掲載する。なお、キャンパスの敷地内にある遊具や建物、建造物やオブジェはどれもユニークでカラフルであり、子どもの芸術への感性を引き出すための工夫とのことであった。



写真上：キャンパス内のマップ

写真下：キャンパス内の1-14の施設について



1. Administration



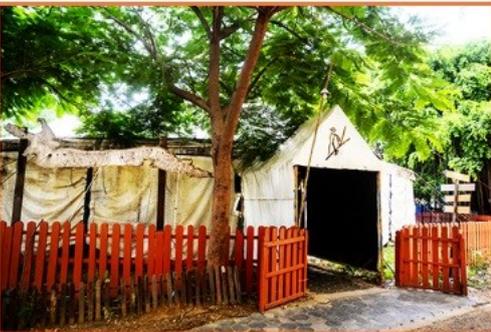
2. Boutique and Café



3. Visual and Applied Arts School



4. Exhibition Room



5. Big Top



6. Music School



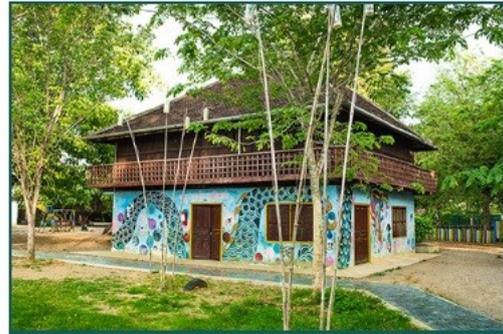
7. Circus School



8. Dance and Theatre School/Artist's Residency



9. Kindergarten



10. Child Development Center



11. Public School



12. Library



13. Computer Lab



14. Social Support Services/Health Center